

## 農業環境研究分野における新たな国際研究コンソーシアムを目指して NIAES 国際シンポジウム 2006「モンスーンアジアにおける持続的農業 のための農業資源の評価と有効利用 — 国際研究協力に向けて —」報告

モンスーンアジアとは、モンスーンの影響を受け、水田を共通の食料生産基盤とするアジア地域のことで、モンスーンアジア各国の農業は北から南まできわめて多様ですが、水田を取り巻く生物多様性の豊かな農業生態系に恵まれているという点で共通するところがあります。また、その一方で、急速な経済発展に伴う農業を巡る環境の変化、昨今の気象変動、グローバル化に伴う外来生物侵入などの農業環境に関わる共通の問題を抱えています。これらの問題の解決のためには、モンスーンアジア地域の研究者が共同して課題に取り組んでいくことが必要です。そこで、今回、農環研が主催し、農林水産技術会議事務局のご後援をいただき、標記の国際シンポジウムをつくば国際会議場（12月12日～14日）で開催し、15カ国から276名の参加がありました。

会議1日目は、モンスーンアジア地域における農業環境問題と今後の国際協力を考えるシンポジウムが行われました。冒頭、農環研・佐藤理事長が、農業と環境に関わる問題の重要性と、その解決のために国際協力が必要であり、新たな研究コンソーシアムの設立を提案しました。続いて、京都大・田中耕治教授から、アジア地域における学際的な地域研究（現場主義）の重要性について、国際稲研究所・R. Zeigler 所長からは、貧困克服と環境の持続性を考えた稲作研究について、また、オーストラリア・クイーンズランド大・S. Fukai 教授からは、東南アジアにおける持続的イネ生産のために国際研究協力のあり方について、北海道大・波多野隆介教授からは、農業活動に由来する窒素の水環境や地球温暖化へのインパクトについて、そして、インド・アンナマライ大・Kathiresan 教授からは、アジア地域において蔓延している侵略的外来植物について、それぞれ講演が行われました。

会議2～3日目には、（1）アジアにおける侵略的外来植物の実態と制御、（2）遺伝子組換え作物からの遺伝子流動とリスク評価、（3）温暖化による東・東南アジアのコメ生産変動予測、（4）モンスーンアジアの農業生態系からの温室効果ガス：放出量と削減策の評価、のテーマについてワークショップを開催し、最新の研究の成果などについて論議するとともに、今後のモンスーンアジア地

域における共同研究の方向について活発な論議が行われました。

会議の最後に総合討議の場が設けられ、佐藤理事長より「農業環境研究の国際協力に向けた国際コンソーシアム（Monsoon Asia Agro-Environmental Research Consortium、略称MARCO）設立」を含むシンポジウム声明の提案があり、参加者全員によって合意されました。農環研としては、今後、この声明に基づいて、1）国際シンポジウム等の研究情報交換の場の定期的な提供、2）コンソーシアムの情報交換の場としてのwebsiteの提供、3）コンソーシアムの下での活動を担う人材の育成への貢献、に努力していきます。



（研究コーディネータ 齋藤 雅典）

農環研ニュース No.73 平成19年1月30日

発行 独立行政法人 農業環境技術研究所 〒305-8604 茨城県つくば市観音台3-1-3  
電話 029-838-8197（広報情報室 広報グループ）  
ホームページ <http://www.niaes.affrc.go.jp/>

**2100**  
国産パルプ配合率100%再生紙を使用  
印刷 (株)高山